
一部50円です



土葬

村で誰かが亡くなると、組頭がすべての家を回って伝える。村の者は仕事を休んで、葬送の世話役をしたものだ。昔の葬式は婚礼と同様、村の重要な儀式であった。中でも大切な役まわりは、死者を埋葬するための墓堀りである。すべての家が順番にその役を引き受けていた。

村の墓は、竹と杉木立が取り囲む山の中腹に、段々畑のように5段につくられていた。村道から急な山道を300メートルばかり登った

ところに小さな広場と小屋があり、すぐ上に墓場があった。

寝棺が入る穴を掘るのは大変である。幾世代にもわたる村の祖先たちが埋葬されている墓場を掘り返すことになるので、色々なものが出てくる。人骨や髪の毛などが出てくれば、それらをまとめて埋めなおすこともしなければならない。墓堀りが大変なのは、単なる肉体労働だけでなく、墓と言う霊場で粗相が許されない作業であるからだ。

祖父が亡くなった時、朝早くから、墓場に酒と肴を持っていき、墓堀りの労をねぎらい感謝したものだ。墓堀りの二人が「古い骨が出てきて、かなんかったわ」と笑いながら言う。「ご苦労さんです。11時から葬式が始まりますから、墓へは1時ごろ着きます。よろしくお願いします」

昼過ぎに葬列の後から男たちが担いだ棺桶が坂道をあがって来る。読経の後、棺の蓋を釘で打ち両端に縄をかけ、大きく掘られた穴に静かに降ろす。まず親族が土をかけ後の者が続く。儀式が読経と共に終わると、直ぐに墓堀り役の人が土を埋め土盛りにする。その上に塔婆と花筒などを差込み、平らな石を置いて線香とお供えの団子などを飾った。

小学校の時、同級生の父親が早死にし、残された彼女が棺桶にすがるように泣き続けていた。墓堀りの村人たちは棺に土をかけられずに困っていた。そんな光景が、暑い夏の陽が頭の上にじりじり照りつけていた記憶とともに鮮明に胸に焼きついている。

私は、墓に埋められた死者のことをいつも考えていた。「どうなるんやろか？ ほんまに土になるんやろか」。人が死ぬということはどういうことなのか、昔の葬式が今も私に語りかけてくる。土葬という風習も無くなって久しいが、何か土葬のもつ大切な意味も消えて、命の重みや人情が薄らいってしまったような気がする。

女の人がおしゃれするのは、男の目を引き喜ばすためだと思っていた。恥ずかしながらこの歳になるまで、信じて疑わなかった。違っていたのだ。女の人は女の目を気にしているのだ。まず自分が納得しないとイケない。

娘の朝は、シャワーから始まり服のコーディネートで毎日家内とひと悶着ある。側らで見ても、男の私には何がそれ程問題なのか分からない。喧嘩になるほどの問題なのだろうか、と、あきれて見ている。一言でも言えば集中攻撃を受けそうだから、黙っている。

男にとっては不可思議な女の世界がある。見て見ぬ振りをするのが一番である。女同士の見栄もおかしいと思うことがある。私がいくら言っても意に介さない家内が、友人の一言で簡単に変わるからだ。男なんて空気のようなもので、女にとっては意識しない生き物であるようだ。

私には気心の知れた男友達が一番。自分の気持ちを分かってくれるからだ。若い時には気づかなかつたが、友達とはありがたいもので、いちいち説明せずとも通じ合える。酒を美味しく心を癒してくれる。

出世の如何は関係ない。酒飲みの友は何ものにも代えがたい。男の幸せな居場所は、そんな時にあると思える。

ヒマラヤへの道 8

梵店主

周囲の反対を押し切って証券会社を辞め、海外登山の為に悪戦苦闘してきたよっちゃんは、ようやくその夢を実現出来そうになった。資金も、少ないながらも先輩達の支援などで何とか目途がついた。よっちゃんが夢想したようには簡単にいかなかったが、とにかく出発出来そうだ。

会長は、よっちゃんに「遠征隊は出発できれば半分成功したようなものだ」と常々言っていた。登れるか登れないかは分からない。何か事故でも起されば途方もない金が必要が、そんな心配は後回しにして、夢遊病者のように喜んでいた。

旅行団が二つのグループに分かれて、アフガニスタンのカイバル峠を越えバミヤンの石仏を訪ねるグループと、チトラルに行くグループを作った。

その添乗員に石川先輩と私の友人と弟が参加してくれた。当時は資料もあまり無かったので、語学と現地折衝能力を持った二人をお願いした。石川さんはウルドゥ語が話せし、麻田君の弟はニュージランド留学二年だったから大丈夫と判断した。

パキスタンには当時軍事政権下であった。言語はウルドゥ語であり、部族によっても違っていて、我らの遠征隊の護衛・監視につく軍人の士官は英語が出来ると聞いていた。よっちゃん遠征隊メンバー四名は全員海外渡航の経験が無かった。大学まで英語は勉強してきているが会話を通じるか不安であった。

よっちゃんは、準備の間に英会話のスクールに通った。現地での交渉を行うには、最低限の会話能力が必要で、今回のような貧乏遠征となれば特に折衝がモノをいうからだ。しかし、



東西の文明が交差する古道を行く。パキスタンとアフガンを結ぶカイバル峠。

すぐに話せるようにはならない。

就職の時には、一応日常会話は出来ますと云っていたが、実は一度も外人と話をしたことが無かった。日本の英語教育がいかに粗末で、役に立たないか、思い知らされたが、なんとかなると思いい、金の管理に全てを集中しようと思った。

現地の治安は良くないので、スリなどの盗難に遭って大事な遠征隊の全財産を盗られたら大変な事になる。よっちゃんは、金物屋で工具箱を買って両替した小額のドル紙幣を一杯詰め込んで行く事にした。パキスタン通貨はルピーであるが、ドルも通用する。現地です少量のルピーは両替する。

山奥で使用する金は、ポーターに払ったり食料を買ったりする際いる訳だから、小額の紙幣でないと困る。つり銭が要るような金では話にならない。パキスタンは今も昔も貧しい国だ。特に、よっちゃんが行こうとしている地域は未開の荒野である。岩石砂漠が果てしなく続き、人影がまばらなところだ。

人家すら乏しいところに、店や銀行などはない。そこに住まう人々も自給自足に近い民であろう。そんな人にとつて紙幣そのものが珍しいにちがいない。

旅行団は遠征隊に援助するために会長が

考えてくれたので、旅行社は使わず自前で工面して、出来るだけ経費を浮かし寄付してくれる有難い企画であった。その為、日程など自分たちで考え交渉しなければならなかった。一九七七年当時、パキスタン北西部へ入る日本の旅行者は稀有であった。

通常では許可が下りないような地域であっても、よっちゃんたちの遠征隊と同じグループということで、便宜を図ってもらった。遠征隊はパキスタン政府から許可を得たのであるから、個人の旅行者とはちがう扱いなのだ。

旅行団の参加者には、山岳会の重鎮が幾人も参加してもらった。往年の会員は皆、裕福だった。この企画は参加者にはたいへん好評であった。

なにぶん金のない貧乏隊であるので、壮行会なども出来なかった。前回の一九七〇年のダウラギリ1峰遠征隊のような、マスコミにも注目された大部隊とは全く違っていた。新聞社の先輩が小さい記事を書いてくれた事で、山岳会関係者が知った程度であった。

こんな弱小遠征隊ではあるが、よっちゃんにとつては、非常に大きく立派な登山隊であったのだ。

「海外登山は、ダウラギリで終わったんや」と言う先輩の言葉を聞かず、しやにむに準備を強行してきた。そんな向こう見ずなヒマラヤ未経験者の貧乏登山隊ながらも、どうにか日本を出発出来そうになったのである。

仏と共に

上原むつえ

以前に簡単にふれた四国の南国市にあるD寺と私との関わりを、もう少し詳しく書いてみたい。私の師匠である池田妙法さんは福井の鯖江にあるR寺の住職をされていた。わたしが身延の大学を卒業してR寺の住職を引き継ぐという約束で大学に行かせてもらったのである。当時の大学の同級生は七七名であつて女子は私とTさんだけであつた。

三年間の勉学を終えて卒業式を控えた前の日に事件は起きた。卒業式に私が首席であつたために答辞を読むことになつていたが、突然、先生に呼び出され「あなたが男子生徒とキスをしているのを見たという者がいる。そんなことをする者に答辞を読まずわけにいかない」と身に憶えのない濡れ衣を着せられる羽目になつた。私は落胆して、生家に帰って飲まず食わずの状態で一週間を過していた。父が「一度、池田妙法さんに挨拶に行つてこないといけない」という勧めで、勇気を出して福井に行った。池田さんは私に会うなり「ここから出て行け」と私を叱り飛ばした。勘当を言い渡されたのである。この結果、私は子弟の關係が切れ自由の身になつた。

こんな事があつても私の日蓮宗・法華經への研究意欲は消えなかつた。親の

援助を受けて縫製工場を経営しながら

池上本山へ講習を受けに行つていた。わたしが、37歳になつた或る日、大

学で共に学んだTさんから「気休めに南国へ遊びにこない？」という手紙をもらつた。久しぶりにTさんに会うのもいいかと思ひ出かけたのである。Tさんの寺は廃寺と言つてもおかしくない有り様であつた。雨が降つたら水が流れるように天井から降つてきた。畳も床もブカブカで腐つていた。離れの間だけは腐食をのがれ寝泊りができるよになつていた。

私は、寺の有り様をみて「はやく、ここから逃げ出さないといけない」と悟つた。ところがすぐにでも東京へ帰りたいのだが、何かと用ができて帰れない。一週間が過ぎた時、本堂の奥にあつた仏像がヒラヒラしていた。よく見ると50センチぐらいの高さの像の壊れている箇所を貼つてあつたと思われれるセロテープがはがれて舞つていたのだ。私は、その哀れな像を見て「これを東京の知人である仏師へ修理に送つたら直してくれるだろう。費用も毎月積み立てている無尽の金が百万余りになつてはいるはずだから、それを使えばなんとかなる。」と胸算用をして早速梱包して送つた。

ところが、一ヶ月たつても送り返してこない。結局この仏像の修理には十

年を要したのであつた。

私は、早く帰る予定でいたし、Tさんも気楽な性質で寺のことをそれほど重大には考えていなかった。Tさんは、私に助けを求めて南国市へ呼んだのではなかつた。軽い遊びの誘いであつたのであるが、周りの人達はそのようには考えなかつた。

数年前まで、その寺には女の行者がいて死ぬまでの三年間、毎日「東京から来た人がこの寺を助けてくれる。逃がしてはいかん！」と称え続けていたので、近所の檀家衆で信じる者がいたのである。

私がどこへ行くにも檀家の誰かが私を逃がすまいとついでくるのである。行者の言つた東京からきた人を私だと思つて村人は私を放さなかつた。

困つた私は千葉の日蓮宗の祈禱師を訪ねた。東京から二時間ほどかけて十時過ぎに奥の院に着き、受け付けの人に祈禱の申し出をした。すると、マツチ箱ぐらいの紙切れを渡され、氏名、年令を書くように言われた。私が紙切れに書き終わりテーブルの上に伏せて待つていると、マイクのような声で「これからあなたの氏名、年令を私が言いますが、違つていたら帰つてください。あつていたら受付の人に言つてください」。そして「上原むつえ 37歳」という声が出た。

見事に祈禱師は私の氏名、年令を言い当てた。受付の人に案内されて廊下を

進むと、七輪に練炭があかあかと幾つも燃えていた。不思議に思ひながら奥に進んでいくと60歳ぐらいの白髪で小柄な人なつっこい顔をした老人がいた。

「今日はなんの用ですか？」と聞いてきたので、

「南国市のD寺の修復事業を私が出来るか聞きにきました」と私が答えると祈禱師は「少しまつとれ、聞いてくる」と立ち上がり奥の部屋に行き、暫くして戻つてきて「大丈夫、やつておくれ」と言いました。

私が「本当ですか？出来るですか？」といぶかしげに訊ねると

「わしは知らん、仏さんがそう言つたから。わしは仏さんとあんたの仲介者じゃから」

祈禱師は練炭に差し込まれ真つ赤になつた8本の火箸を引き抜いて、私の頭から足先まで、御経を書いてくれた。

あかあかと燃えるような火箸は「えい」という気合でナマ暖かい程度にしか感じられなかつたが、付いてきていた人が笑つたので、祈禱師は彼女に火箸を少し近づけたら、ジリジリと髪が燃えるぐらい熱い火箸であつた。

祈禱師は私に、

「おまえさんは、途中で投げ出さんから大丈夫だ。出来る。金もなんとかなる」と言つてくれた。

一・死の定義の変遷

祖蔵 哲

2008年12月8日、最愛の母に別れを告げました。身体が丈夫でなかった私は幸せなことにかえって一番母の愛に包まれていたともいえます。母は大正2年生まれ95歳という長い人生を歩きました。しかし今の時代とは大きく異なり戦争の世代です。彼女は二十歳を前に日赤看護婦から陸軍に召集され青春の大半を海外の戦地で従軍看護婦として転戦しました。人間の残酷さ、愚さを身をもって体験してきたことでしょう。還ってきた時には30歳を過ぎていました。それから戦後を生き抜いたのです。私たちのこの恵まれた環境とは大きな違いがあります。そんな母の死期に際して考えたことが二つあります。ひとつは「死の定義」もうひとつは「死の意味」です。

そして医師は病人をなおす義務が発生するのです。医学の最低の道徳として古代ギリシャの医学の祖ヒポクラテスの時代からずっとこの規範は続いています。医者は病人を前にして何もしないということは許されないのである。ということは、死期を迎えて病院へ行くこと自体が延命行為になるのです。よくある場面ですが患者が意思を失った状態で家族が集まって延命行為をするのかどうかの話し合いをします。しかしそもそもこの時点で延命行為は始まっているのであってどこでやめるかを話しているのです。しかし現在の法律ではいったん延命行為が開始されるとそれをやめてしまうことは犯罪になります。決定する権利はあるがやめる権利は誰にもないという矛盾もあります。

さて、自然死というのは「薬も何も処方しないで自分の手で食べられなくなったら死ぬ」という状態です。たしかにニュースのなどでは長いこと音信がないので心配になって訪ねてみると独居老人が部屋でなくなっていたということになります。しかしこういったことは本当に稀なこと、普通には自然死というものがなくなるといえます。それでも昔から、人間の知恵で薬草を処方したり祈禱をしたりして延命は願ったことでしょう。

私の母の場合、95歳という高齢もあり流動食を食べられなくなり小さなガンが見つかった時、医師からひとつの判断を求められました。医者の義務として病院で預かっている以上治療を続けねばならない。しかし高齢でもありそれに耐えられる保障もないし「あと何日生きられるか」言うことも出来ない。この時点で家に帰るのもひとつの選択であると。母を診てくれた医師は若い人でしたが人間的であり、病状についてもきっちり説明してくれる非常に信頼出来る人でした。この言葉は、決して医療放棄ではありません。ある意味、自然死という選択を提示してくれたのです。

ここで私は悩みました。どうすればいいのか。家に帰れば、点滴で栄養補給は最低限出来るが、確実に体は弱り餓死に近い状態なるだろうということ。予測出来ます。これは独死に近い状態です。他人の死に対しては無理な延命してどうなるか本人がかわいそうなどではないかなどと考えていました。しかし、一旦身内の死になるとやはり一日一秒でも生きていて欲しいという気持ちに変わりました。息をしている、暖かい血が流れている、熱を出して苦しんでいたってまた安らかな顔がもどってくる希望がある、それだけでもいいという感情が湧いてきたのです。

人にとって死の受けとり方は三様あるといわれています。まず三人称の死です。彼とか彼らといった自分との関係では一番遠い、第三者といわれる一般的な人間の死です。ニュースで交通事故や事件などが起こり人が死亡した場合いろいろな意見や感想をいいます。これが三人称の死です。次は二人称の死。一人称はI、あなたということ。つまり自分に身近な人の死です。

一般ではなく自分と一番かわりの深い人々。友人、親族、家族などです。今度の母の死の場合はこの人称の死です。私たちが死ということを意識し体験できるのはこの死までです。最後の一人称の死は、私の死は、つまり自身自身の死です。これは普段はめったにしか考えません。しかし私たち人間いや生物はやがては死んでいくという運命にある以上、考えないわけにはいかないのですが。

ということでのこの母の死期にあたって私は二人称の死、つまり身近な人間がこの世にいななくなるという事象に直面したのです。そして問題はその命の延長が私の判断にまかせられたということなのです。私は考えました。出来るだけ科学的に客観的に、つまり相手の立場になり結論を出そうとしました。(つづく)

義兄とその家族 (6)

義兄のガンにおびえる、弟の上の子は中学2年。ヨチヨチ歩きのところから鉄道好きで、プラレール(プラスチックの列車の玩具)をはじめ、鉄道系のおもちゃで育ったような子だ。義兄も生粋の「鉄道マニア」。自分の部屋に模型のレールを敷いて、何台もの列車(Nゲージとかいうらしい)を走らせて遊ぶ「テツ」だ。この義兄の「お宝」で、弟の子供も遊ばせてもらおうようになって、二人は急接近。何時間でも、二人でもくもくとレール遊びに没頭し、飽きることがないようだった。だから、甥っ子は「死ぬかも知れない病気にかかっている、おっちゃん」の前で、表情をこわばらせ、しょんぼりしていた。

正月前後は、病いを抱えた義兄には大きなヤマ場だったと思う。作家の井上ひさしが肺ガンで亡くなったが、発病から確か半年足らずだった。キャシー中島の娘さんも肺のガンで亡くなったという新聞の記事を見たが、この人もガンとわかってから数カ月だったみたいだ。こういう人たちは最高の医療を受けているはずなのに、それでもアツという間に命をもつていかれている。もともと痩せぎすの義兄の体重は40キロを割るぐらいで、年齢には似つかわしくないほど真っ黒でふさふさしていた髪の毛も抜け落ちていた。でも、家族って変だ。「こんなに痩せてしまって助かるのかな」と思わないわけではないし、有名人が同じ病名で亡くなると、ゾツとするのだが、それでも「義兄にかぎって、死ぬことはない」と何故か確信に近いものが湧いてきて、気がつけば、心配をかき消すように「大丈夫、大丈夫」とつぶやいている。姉は当然だが、私の何倍もの振幅で、心配・不安・疑念と「大丈夫、大丈夫、死ぬわけがない」の間を行ったりきたりしているようだった。

「〇〇(義兄)が退院したら、メイちゃん(孫)とケンちゃん(甥の名前だ)をお借りして、旅に行こうと思うねん。あの二人が元気をくれる。免疫力向上に最高やる?。しやけど、私ひとりやったらイヤやから、アンタも一緒に来てな。旅費は出すから」
こういう話をするので、元気を出してはいたのは義兄より姉ではないかと思うが、こんな話をしていた今年のお

肺ガンは脳に転移しやすく、骨にも転移するらしい。現に、義兄は骨への転移が見られ、それを医者から告げられた義兄は、たまたま見舞いに行った

私に「〇子(姉の名前だ)にはかわいそうで言えないんだ」と、しきりにテイツシュで鼻をかみながら、私に話した。

私は自慢ではないが、泣き虫だ。テレビを見ていても、(一人だったら)オイオイ泣く。本や映画でもポロポロ泣く。だけど、このときは泣かなかつたし、泣く気にもなれなかつた。「冗談じゃない!泣いている場合じゃない」と妙に冷めていた。ただ、ふだんはやたらにおしゃべりなのだが、このときは義兄に何も、なんにも言えなかつた。だまって、義兄が何回も何回も鼻をかむのを見ていた。

それから、しばらく後に、姉は義兄の骨に異常があると知ったが、「骨に転移してしまった」と泣かなかつた。代わりに怒った。「抗ガン剤と放射線で、骨までポロポロにされた」と。義兄が姉にどこまで隠しているのかわからないので、骨のことはその後、何も聞いていないのだが、ひよつとしたら、姉の言う通りなのかもしれないと思っている。というのは、森ノ宮の成人病センターを退院してから、義兄は姉に伴われて、先端医療のハシゴをしているのだが、そこで「骨に転移が認められる」とは言われていないようなのだ。1月6日。義兄は成人病センターを一旦、退院した。あとは通院で、抗ガ

ン剤治療を続けるのだ。それが終わるか、終わらないうちに、姉は先端医療を施してくれる病院に義兄を連れて行った。真っ先に訪ねたのは、吹田にある免疫細胞療法のクリニック。患者本人の血液を培養して、ガンをやっつける免疫細胞を活性化し増殖させて、本人の体に戻すという治療だ。

「初日な、10分ほどの話と(義兄の)血イ取って、初診料みたいなものかなあ、それが3万1千500円で、その血イを培養するのに26万2千500円の費用がいるねん」と姉が私に説明してくれた。「2月1日が1回目、次は2月22日。このときも26万2千500円、3回目が...」。その3回目で、義兄の血液がうまく培養できなかったから、お金を返します、とクリニックから言われて、義兄の免疫細胞療法は終わった。「55万円を捨てたんと一緒にやわね」と姉はサバサバと言った。

泣きも怒りもしなかつたのは、2軒目の先端医療クリニックで、初めて信頼できるお医者さんに出会い、カテーター療法を受けることにしていたからだ。「こっちはね、5万7千750円とカテーター治療の費用が49万9千350円と、血管ポロポロでマイクロカテーターとかいうものに途中で変えたから、プラスアルファ5万1千円、

「払ってん」と姉はとくとくと私に教えた。先端医療費の保険の宣伝が多いのもうなづける高額ぶりだが、もちろん

携帯エッセイ 22

「カタカナ」

母の会話にほとんどカタカナが出て来なかった。パン、バターぐらいしか聞いたことがない。何故だろう、と思っていた。

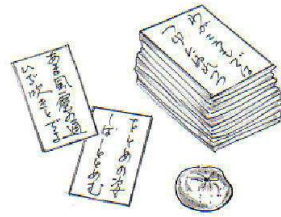
『大正生まれだからカタカナに縁が薄かったのだろうか。いや、そうでもあるまい。他のお年寄りの会話もカタカナが少ないように思えるし』などと、折に付け考えていた。

その答えは、我が身の老いと共に分かった。五十五歳ころから私も『どれ』が始まった。「あれ」「それ」が多くなった。固有名詞が中々、思い出せない。特にカタカナが口に出て来ない。そこで気づいた。

『人は、カタカナから忘れていくのではないか』、そう思うようになってから、私は出来るだけ漢字を使うようにした。例えば『トイレ』という言葉は使わず『便所』という言葉を使うようにした。

漢字は思い出し易いからだ。漢字には意味がある。例えば、食事は「シヨクジ」と言う音と「食べる事」と言う意味が重なって頭に浮かぶ。

『人間は言葉の数だけ考えられる』というのを何かの本で読んだことがある。言葉を忘れない努力をすることはより良い老後を送るのに大切なことだと思う。(龍)



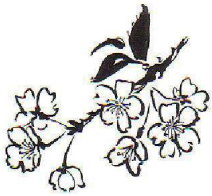
俳句

○ 街道に町家の医院鳥曇

○ 藍甕の土間に呟く遅日かな

○ ささやかな宴に春灯揺れており

直子



高槻からの眺望 4

敷島 旭

高槻の「槻」(つき)という文字は「ケヤキ」の古名だそう。室町時代に高槻市には、大きな槻の木があつたらしい。その高さは六十メートルにも達したと記録されている。図鑑によると、ケヤキは普通二十メートルから二十五メートルぐらいだから、もし六十メートルが本当だとしたら巨大なものであつたと言える。高槻は、文字通り、『高い槻の木のある街』だったのである。その木が、現代において「市の木」に指定されているのは、うなずけるところだ。

ケヤキを「市の木」「町の木」「区の木」に指定している地方公共団体は多い。しかし、不思議なことに、その数は圧倒的に関東に多い。茨城県では四市、栃木県では二市町、埼玉県では九市、千葉県では二市、東京都では十六市区町、神奈川県では二市、合計三十五市区町となる。それに比べると近畿では、京都府では舞鶴市、大阪府では高槻市の合計二市だけである。関東が三十五で、近畿が二。これはどういう理由であろうか？ 植物の生態学的な理由によるものだろうか。ケヤキは広く四



5、6月に開花を迎える
卯の花

国や九州にまでも分布している。だからその点では説明が難しいだろう。どなたかご存知の方には、その理由をお教え頂きたいと思う。

「市の花」は卯の花である。これは学名“ウツギ”と言われる。でも多くの日本人には卯の花が、やはり親しまれる名前だろう。「卯の花の匂う垣根に、ホトトギス、早やも来鳴きて……」という歌は、昭和三十年頃までに生まれた人々には懐かしいのではないだろうか？ 高槻市の皆様は、その「市の木」「市の花」をご存知だろうか？ 恥ずかしながら私は、自分の住んでいる藤井寺市の「市の木」「市の花」を今日まで知らなかった。もつと反省しているのは、市長のお名前も知らなかった。本当に、反省しなければならぬ。因みに、藤井寺市の「市の木」は梅で「市の花」は菊だ。ちよつと地味な感じがする。

私が地元の「市の木」「市の花」挙句の果てには、市長のお名前まで知らなかったというのは個人的な問題に違いない。でも、他に原因を転嫁するわけでは

「普天間問題」から見えてきたもの

明石 幸次郎

くはないが、このような現象には社会的な背景もあるのではないだろうか？つまり、私たちは住居のある場所に、実は「住んでいない」のだと思う。地域社会に属していないのだ。多くの人々は会社組織に属してきた。生活経済は会社に依存している。だから会社については関心がある。地域社会には関心がない。経済的には恩恵を受けないからである。少なくともそう感じてしまっている。どこの国でも、社会が資本主義にのっとって近代化されてくると、地域社会が弱体化してくる。皆、互いに“隣は何をする人ぞ”という状態になる。仕方がなかったのかも知れない。しかし、地域社会の崩壊が、今、人々の暮らしに暗い陰を投げかけている。これを打開する新たな仕組みが必要なのは、誰もがわかっていることなのだが……。

(前回まで、この寄稿文は“高槻について考える”と致しておりました。しかしながら、文脈を顧みまずと、実際のところは“高槻について考える”というよりも、“高槻に関する話”から、他のことに思いを馳せる”のような面が強くなりました。そこで題名を今回のものに変更いたしました。尚、文体も「だ」「である」調に変えました。ご了承をお願い申し上げます。)

鳩山首相が約束した「普天間移設先は海外、最低でも県外。米国も沖縄も連立与党も全てが合意して5月末決着」は、前政権の自民党が作った現行案（辺野古沖合い）に戻り、米国との合意（元々合意していた）は取れたものの、沖縄県、地元名護市、連立の社民党の合意は得られず、5月末だけの約束期限に間に合わせたような政府対処方針と日米共同声明が5月28日に出されました。

連日マスコミは一連の鳩山首相の発言、行動に対して、あらゆる言葉で首相の無責任さ、言葉の軽さ、政治的手腕のなさ、日米同盟の信頼を失墜させた等々。挙句の果ては、今夏の参議院選での民主党の惨敗まで予測しています。元々、鳩山さんはアメリカとの従属関係から対等関係の構築、アジア諸国との友愛関係、特に中国重視という外交方針は政権発足の時から言っていました。そこから沖縄基地の国外移転による基地機能の見直し、負担の低減を図ろうとする友愛的な想いだけが先行してしまい、それを現実的な具体的実行に移す戦略、戦術を描き、汗をかき、泥を被って鳩山さんの為、沖縄の

為に尽くそうと言う忠臣的な外交プレーンが残念ながら閣僚、党員、官僚、民間人（何人かはいます）にも居なかったからでしょうか。全然実行に移すだけの政治のプロセスが何も見えて来ませんでした。それは、忠臣的ブレーンと盟友を鳩山さん自身が野党時代から作って、時間をかけて勉強をしてこなかったことが、今回の首相の迷走的な動きとプロセスが無かったことの予って来る原因の様な気がします。そうでなければ、自民党が10年近くも賭けてやっと纏め上げてきた基地移設先の問題を政権発足からたった8ヶ月で、最低でも県外移転で解決しようということを打ち上げた時点で、誰しもホンマに出来るのと思っただけでありません。しかし、何度も腹案があると首相自ら言うからには、本人の職務を賭けた、相当の熟慮と覚悟を決めたウルトラC級のものだと一瞬期待をしたものの、その腹案は徳之島への一部移転という、何かとつけて付けた、しかも反対派を金と時間をかけて説得すると言う



従来型のものでありました。

しかし、この問題で学んだことは、鳩山首相の稚拙な政治的手法は問題があることは当然として、マスコミが鳩山首相をバカにして、この政権を叩けば叩くほど、アメリカと親米官僚が喜び、日本のマスコミを味方につけて、アメリカの軍事戦略である抑止力を強化するため、日本側負担増の要求を難なく通し、同時に自分達の言うことを聞かないとアメリカを含め政治主導では、何も動かせないぞと言う外務、防衛官僚の政権内影響力の増大と復権が図られてしまいました。菅さんを取り込んで既に財務官僚が主導権を握った財務省と共に、再度自民党時代に戻り官僚が政治を実質的に動かし、省益が国益を優先させて、この国を動かしてきた中央主導型官僚国家体制をマスコミと一緒に作って作る方向に誘導される危険性があるのではないかと言う事です。政権が変わってまだ8ヶ月で、民主党の政治主導は駄目だと言う結論を出すのは、如何なものか。授業料を払い、現に鳩山さんのお陰で、防衛問題を含め沖縄の基地問題を国民は少しは自分の問題として学びました。これからは、日本人が政治的に成熟するまでには、まだまだ、民主党政権で学ぶ事が多いにあると思います。マスコミの言う事は、正し事実かどうかは分かりませんね。

気配

日本語には「気配」「気がまわる」とか、いろんな言葉の表現がある。日本人は、ただならぬ気配を「虫が知らせた」ともいう。「虫の好かない人」「疝の虫」「腹の虫がおさまらない」とか……。

これらは、なかなか説明のしようがない。その人、その人の口から出て、何かを表わしていえる言葉だと思ふ。

「虫が知らせる」といつても、蚊かブヨかが飛んで来て耳元で知らせてくれるものではなし。自分の身体で何かを感じるのではないかと思ふ。情報の連絡というのが虫の知らせとなったとか。

屋根で、カラスが鳴いても不吉な予感を覚えたり、それを近所の立ち話にして楽しむ。また、夜暗いところでは何となく不気味な気持ちになったり、誰も歩いていないのに自分の側に寄って来るように感じたり、その気配を感じてしまう。人間の五感で感じるものだけが此の世に存在すると思ってしまう。

好きな事

人間の行動にしても、考えにしても、一度した事、言った事は必ずそ

の人の中に蓄積されていくもので、誰も知らぬからといってウヤムヤに消えてしまうものではない。

良い事にせよ、悪い事にせよ、その一つ一つの行いが、その人をつくり人格となり性格となるのだから、もつと上手に生かしてゆかねばならない。

すべて心の苦にしていた事を一度やっつけてしまえば、それを繰り返すのは、ずっとやさしくなり苦痛がなくなってくる。人から見れば「あんな事ようやる」と思われる事でも当人にとっては案外簡単にやっつけてのけることが出来るようになるものである。

だから大抵の場合、自分の好きな事をする時には、いつもの仕事より、うんと精力を消耗していても、けろりとして疲れを感じないことが多い。やろうと思つた事をしてしまつた満足感と、ああ疲れたと思う一瞬も長い間にわたつて自分に言い聞かせて来た。悪い習慣の一つかも知れない。年のせいかなア。

極楽のあまり風

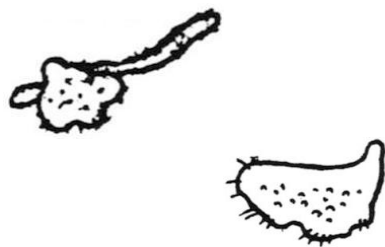
すぐ前の田圃から心地よい風が吹きぬけてゆく。北近畿線に乗ると篠山の手前から丹波らしい風景になり、丹波へ帰つて来たという感じになり

ホツとする。

丹波から届いた山のいもの箱に「美容と健康に滋養豊富な山のいも」と書いてある。滋養という言葉には何か郷愁のようなものが感じられる。「クラス会に行かれて楽しかつたですか?」と思わぬ人から声をかけてもらつてホツと丹波人間になり、「ええ、とつても」と、我に却つたひと時。

切干大根もらつてきた。大根は生で炊いても干してあつても美味しいけれど、どう調理しても、おならくさいのは何故。

あの匂いこそ、美味しさのものとかなと思いつつ食べたけど。



編集後記

今回より新しい連載が始まります。祖蔵哲さんです。彼は、エンジンアで大変面白い人です。楽しみにお読み下さい。

先日、山の先輩に神戸で酒を御馳走になった。神戸には、大阪とはちがう雰囲気がある。何となくハイカラな臭いがある。

先輩の行きつけの店で、ママに「長く店やっついていて嫌なことは何ですか」「愛情の押し売りが一番困るわ。毎日一年余りも通つてきた客には、ホトホト困り、こんといてと怒つたわ」「美人には美人の苦労があるんやね」「ほれてきた男は数知れないわね。しかし、結婚したい男とは未だ会わないけど」

隣に座っていた客が「今、目の前のママには酔っているが、酒には酔っていない」とママに言う。男のバカは小懲りないものだ。

夏物お仕立てセール

着物地の絹、紗、麻から涼しい洋服を仕立てます

☆☆☆

着物から服を仕立てます

梵~ほん~